

## 岩手医科大学歯学会第21回例会抄録

日時：昭和61年2月22日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部C棟6階講義室

## 演題1. フッ素洗口の終止後う蝕予防効果

○稲葉 大輔, 田沢 光正, 飯島 洋一,  
宮沢 正人

岩手医科大学歯学部口腔衛生学講座

フッ素洗口のう蝕予防効果は従来主として洗口期間内について明らかにされているが、洗口終了後の実態は十分に明らかにされているとは言い難い。今回演者らは小学校在学中にフッ素洗口を経験した集団の追跡調査をもとに、洗口終了後どのようなう蝕有病状況ならびにう蝕増加状況にあるかを検討した。

調査対象は花巻市西南中学校の昭和57, 58, 60年在校生全員で、同校生徒は太田小学校ならびに笹間第一、笹間第二小学校の3小学校出身者により構成される。この内、太田小学校出身者は小学校在学中にフッ素洗口を3.5～6年間経験し、卒業時にこれを終了した後中学校に進学しており、洗口群とした。その他の小学校出身者は小学校在学中にフッ素洗口を経験しておらず対照群とした。太田小学校のフッ素洗口は500ppmFを用い昭和52年秋より全校児童を対象に開始され、原則として週5回実施されている。なお西南中学校ではフッ素洗口を実施していない。

口腔診査は視診型により、複数の診査者が出身小学校をブラインドした状態で昭和57, 58, 60年のそれぞれ春季に実施した。

洗口群と対照群の間でDMFT Indexならびに歯種別DMFT歯率を比較した結果、洗口群の各指標は歯種別DMF歯率の一部を除いて洗口終了直後、1年後を2年後ともに対照群に比較して低い値を認め、低いう蝕有病状況が調べた限り終了2年後まで持続する傾向が観察された。

また、連続受診群を対象としてDMFT Index・歯種別DMF歯率の年次推移ならびに歯種別の発病歯率を洗口群と対照群の間で比較してう蝕増加状況を検討した結果、本研究に関する限り、洗口群におけるう蝕

増加は対照群と同程度である傾向が観察された。

## 演題2. 宮守村における歯科保健活動とその実態

○深沢 範子

宮守村歯科診療所

宮守村は昭和52年以来、村政の重要政策に村民の健康保持と増進ということをかかげ、実践してきた。しかし、長年、無歯科医村だったこともあって、口腔衛生面では、かなり立ち遅れていた。しかし、7年程前から歯科予防活動にも力を入れ、一応の成果をみたので、中間報告として、報告する。

現在の乳幼児検診等は、各戸に配布された保健ごよみを見て、自主的に受けるシステムになっており、次のようである。

(妊婦検診及び母親教室)

1歳・2歳児検診とフッ素塗布・予防教室、1歳半・2歳半・3歳半検診と個別指導又、幼稚園・保育所、小・中学校は毎年春または春秋2回の検診を行っている。昭和57年度からは岩手医大小児歯科教室の援助も受けて、詳しいデーター分析も行ってきた。

昭和60年度の春の検診結果をみると、D者率は小学校の30～40%、中学校では60～70%である。各う蝕分布は、殆んどがC<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>であり、C<sub>3</sub>～C<sub>4</sub>は0に近い。7年前、殆んどの第一大臼歯がC<sub>3</sub>～C<sub>4</sub>であったのを思うと口腔内の状態はかなり改善してきたものと思われる。一人平均のう蝕数も小学校では0.68～0.98本と少ないが中学校では2.26本と多い。DMFT指数は、小学校平均2.3で、まだ目標には遠いが、予防活動の恩恵を受けなかった現中学3年生の女子になると8.9という異常高値を示している。各幼、保育所、小学校では給食後ブラッシングを行っているのに、中学校ではそれが行われておらず、大部分の第二大臼歯をう蝕にしまうのも一因である。

昭和58年から始めた妊婦検診は約30%の受診率しか

ないが、口腔衛生の向上にかなり寄与できたものと思われる。他、広報や種々の集会の機会を利用して、啓蒙活動を行っているが、最も意識の低い、最も啓蒙の必要な層がいつも落ちこぼれている現状も否定出来ない。本当の意味の予防活動の展開はこれからだと思っている。

### 演題3. 本学小児歯科外来における外傷患者の臨床的観察

○伊藤 雅子, 野坂 久美子, 守口 修,  
小野 玲子, 甘利 英一

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

昭和55年から60年までの6年間に当科外来を受診した小児外傷患者 255名について、外傷状態ならびにそれに対する処置内容、経過について検索した。その結果、乳歯外傷は151人(264歯)、永久歯66人(110歯)軟組織のみ37人であり、男女比はいずれも2:1で男子の方が高かった。年齢別の出現率は、乳歯では、1, 2歳児が最も多く両者で約60%を占め、永久歯では、8歳児が約24%で最も高かった。歯種別は、乳歯ではAが最も多く64%、次いでB16.3%、A11.4%であり、永久歯では、1 80%、2 8.2%、T 7.3%の順であった。月別の外傷患者数は、乳歯では季節の変わり目に高い出現率を示したが、永久歯では月別の変化はあまり見られなかった。1人当たりの外傷歯数は、乳歯、永久歯ともに上顎において1歯が最も多かった。受傷から来院までの期間は、乳歯、軟組織では、1日目が最も多く、次いで当日であったが、永久歯では当日、1日目が最も多かった。受傷原因は、強打が32.6%と最も多く、次いで転倒の31.8%であった。外傷状態は、乳歯では脱臼が53%、永久歯では歯冠破折が45.5%で最も多く、歯根破折は、乳歯、永久歯ともに最も少なかった。外傷状態と歯種との関連性は、乳歯では完全脱臼がAに多く、他の外傷状態はいずれもAで最も高い出現を示した。永久歯では歯頸1/2の歯根破折を除いては、1が最も高い出現であった。年齢別の外傷状態は、乳歯では不完全脱臼が1, 2歳児に多く、永久歯では脱臼、動揺が9歳以前に集中していた。処置内容は、乳歯、永久歯ともに歯冠破折に対しては、充填、RJCrが多くを占め、不完全脱臼、重度動揺では、固定あるいは整復固定が最も多かった。また、抜歯は従来の報告に比べ非常に少なく、と

くに乳歯で16.3%であった。乳歯の抜歯は、不完全脱臼では完全脱臼に近い重度のもの、歯根破折では歯頸1/2の部位のものが多かった。また、露髄、軽度動揺の抜歯は、1例を除いて全て1カ月以上経過してからの来院であった。

### 演題4. 先天性多数歯欠損を伴う若年者の補綴処置の一例

○古川 良俊, 佐藤 理一郎, 石橋 寛二,  
中野 廣一\* 石川 富士郎\*

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座\*

日常の臨床において、先天性の多数歯欠損症例に遭遇することは比較的まれなことである。今回、我々は15歯先天性欠損症例を経験したので、若干の考察を加えて報告する。

患者は18歳の女性で、前歯部審美障害を主訴に、昭和59年7月17日に岩手医科大学歯学部矯正歯科および第二補綴科を受診した。家族歴、既往歴、現病歴に特に問題になる点は認められない。前歯部から小白歯部にかけて歯間スペースがあり、全体的に歯の倭小化傾向が認められ、欠損部位にX線写真上でも歯胚が観察されず、抜歯の既往もないことより、

Partial Anodontia (  $\frac{8\ 5\ 4\ 2}{8\ 7\ 5\ 2} \mid \frac{2\ 4\ 8}{3\ 5\ 7\ 8}$  欠損) による空隙歯列および  $\frac{D}{E} \mid \frac{D}{CE}$  乳歯残存と診断した。

本症例では、若年者特有の心理的特性(容姿に対する強い願望や劣等感)から、早期の審美性回復により心理的負担を軽減する必要があった。そこで、補綴前処置として歯の移動を行い歯間スペースを整理し、接着性レジメンを応用した暫時的橋義歯により審美性と咬合の回復を試みたところ、良好な経過を得ることができた。しかし、偏心位咬合誘導の確立が不十分で、口腔内環境が安定する4~5年後に、最終補綴処置で回復する予定である。

今回、このような症例にたずさわって、複数科によるチームアプローチの重要性が示唆された。

### 演題5. 歯科処置に全身麻酔を必要とした症例の検討

○渋井 暁, 水間 謙三, 佐藤 雄治,